



メイキング

オブ

鬼と

かぐや姫

オリジナル
ディレクターズカット版付録

天見谷行人

はじめに

すでに発表してしまった作品について、作者は黙って読者の審判を受けるべきだと私は思う。

「この作品はこのように解釈して欲しい」とか

「あなたの未熟な経験値では、俺サマの高尚な作品は理解できないんだよ」などと後から作者がほざくのは言語道断である。

もし、このような苦し紛れのメッセージを発信する作者がいるのであれば、それは作者自身が未熟者である事の何よりの証明である。後出しジャンケンと同じで卑怯者のやる事だ。

と、ここまで前置きして.....

一步間違うと「後だしジャンケン」と批判されそうな企画を、読者に提案しようと思うのである。先に私が発表した「鬼とかぐや姫」について、その制作過程を読者の眼に晒そう、というのが今回の企画なのだ。

私は映画ファンである。割と熱心な方だと思う。そんな映画ファンなら誰でも思うのが、その撮影現場を、一度でいいから覗いてみたいということだ。

一つのシーンの撮影現場、役者や、監督、カメラマン、照明、録音、さらには衣装さんや大道具、小道具などのスタッフさん達が、どのように現場を駆けずり回って撮影しているのか？ それを想像しただけでワクワクするのである。

最近のレンタルビデオ店では、ブルーレイディスク作品をよく見かけるようになった。ブルーレイディスクの中には特典映像として、映画のメイキングが収められていることが多い。私は映画本編もさることながら、この特典映像を目当てに、ブルーレイディスク作品を探し廻っているときがよくある。

これと同じように、一つの物語、一つの小説を作る過程を、メイキングとして視覚的に捉える事ができないものか？ と思ったのである。

幸い「鬼とかぐや姫」は平安時代の姫君を題材にした、私にとって初のファンタジー時代小説であり、参考にした資料は、視覚的に大変刺激的なものばかりであった。私はその資料を初めて眼にしたときの感動や知的興奮を、読者と共有できないものか？ と思い、ここに一つのささやかな小説の制作過程を公開する事にした。

なお「鬼とかぐや姫」は神戸新聞文芸欄への投稿を前提に創作した。その投稿規定、原稿用紙10枚という制約のため、推敲、編集が必要となった。参考までに読み比べてみていただくのも面白い趣向かもしれないと思い、ここに原稿用紙14枚分のオリジナル版を掲載する。

これは格好つけて言えば映画の「ディレクターズカット版」といえるかもしれない。

前述したように、もちろんこれは、作品の未熟さを補完しようと意図したものではない.....、という苦しい言い逃れをしておく。

それこそ、恥の上塗り覚悟で、あえて私の恥部を晒そうというのだ。私はこんな風に小説を作ったのである。

「鬼とかぐや姫」～ディレクターズカット～

「鬼とかぐや姫」～ディレクターズカット～

本文

ある日の事である。赤鬼がひとり、橋の上に佇んでいた。橋の下には三途の川が流れている。近くに見える険しい山の麓では、炎が燃え盛っていた。この世界に落ちて来た人間達を釜茹でにするための炎である。時折、炎は渦を巻いた。火の粉は黒々とした天空にまで舞い上がってゆく。紅蓮の炎が照らし出す川面は赤黒い血のようにおどろおどろしい。やがて赤鬼は何を思ったか、金銀七宝で造られた橋の欄干によじ登った。足の裏に金属の冷たさが感じられる。赤鬼は眼を閉じてゆっくり、すう一つと息を吐いた。やがてその身体は何か委ねられたかのように、ゆっくりと川面に向かい、吸い込まれるように落ちて行った。橋の上にはもう誰もいない。

ーバリバリ、ドスーンー

身を引き千切られる様な痛みで、赤鬼は気を失った。

ーどれほどの時間が経ったのだろうー

ほのかに蓮華の様な香りが漂っている。それはどこか儂さの中に高貴さを感じさせる、爽やかな香りだ。

ーまさか、ここは天上界か？ー

それにしても身体が痛い。赤鬼はうっすらと目を開けた。

「こう～やあ～、ペツタン、こう～やあ～、ペツタン」

何の声だろうと身を起こしてみると二匹の兎が見えた。どちらも烏帽子を被っている。かけ声をかけながら全身で踊るように杵を打ち振るい、一心不乱に餅をついていた。

「気がつきましたか」

小さな硝子の鈴が響く様な愛らしい声がした。驚いた赤鬼は振り向いた。そこにいたのは十四、五歳と思われる少女だった。彼女の周りには、なぜか明るく光り輝いている。少女は長い着物を何枚か重ねて着ていた。その重なりあった袖口は、濃い緑から薄い緑へ、薄い緑から黄色へ、黄色から白へと変化している。その色目は、初夏へと移り行くこの季節にふさわしかった。

「あのう……ここは天上界ですか？」

腰を激しく打ち付けたらしい。赤鬼は腰をさすりながら少女に尋ねた。

「いいえ、地獄ね。たぶん」

赤鬼は辺りを見回した。自分が身を投げ出した橋は、遥か天空に微かに見えている。ここはまだ地獄だった。彼らは地獄の賽の河原にいたのだ。

「姫様、そのような者と関わりますと穢れがございますぞ」

餅をついている片方の兎が声をかけた。

「もち丸、大丈夫ですよ。これがありますから」

姫と呼ばれた少女は、胸元の御守袋をとりだしてみせた。御守袋には、すいこまれそうなほど鮮やかな瑠璃色の玉が二つ結びつけられていた。姫はもう片方の兎に声をかけた。

「ねえ、つき丸、あなたも久しぶりにお餅がつけて嬉しいでしょう？」兎は答えた。

「姫様、近頃は我らが月も、人間どもが騒がしゅうて、いけませぬなあ。それにしても、まさか地獄で餅のつき放題とは。洒落た趣向でございますなあ、わっはっはっ」つき丸と呼ばれた兎は

、小躍りするように餅をついている。赤鬼はハツとした。

「もしや、あなたたちは、月の……」

「ええ、あれに乗って来たの」 姫が振り返った先には、竹を網代に編み上げた見事な牛車が留っていた。よく見ると、牛車から外された牛を世話しているのも、烏帽子を被った何匹かの兎達である。

「今日は牛車の試し乗りをしていたの」

すると、もち丸と呼ばれた兎が口を挟んだ。

「量子テレポーテーション機能付き最新型牛車ですぞ。それをまあ、こいつめ、こんな姿にしてしまいおって」と赤鬼を睨んだ。改めて牛車を見てみると、その天井には、ぽっかりと穴が空いている。

「私もいけなかったのよ。新車だからちよつとはしゃいで『牛車ナビ』を悪戯したの。そしたら地獄に迷い込んだじゃった。面白そうだから地獄巡りをしてたのよ。そしたら、いきなりあなたが落っこちてくるんだもの、なかなかないわよ。こんなアトラクション」

「本当にご迷惑をおかけしました」

赤鬼は深々と頭を垂れた。

「本当に私は、わたしは、なんで、なんで、こんなにも不器用な……」突然、赤鬼はワツと泣き始めた。姫は赤鬼を不思議そうに見つめた。赤鬼は嗚咽しながら話し始めた。

「地上界の小さな村へ出張した折りの事です。もう村には田植えをする者がいないと、老人が悲しんでおりました。私はそれで田植えを手伝いました」赤鬼は涙をすすりながら続けた。「老人はお礼にと私に酒を振る舞ってくれました。しかし私は下戸でして、すっかり酔っぱらってしまいました。老人には孫娘が一人おります。その子が本物の鬼と、鬼ごっこがしたいと言い出したのです」

「すごお〜い、私もしたいわ、リアル鬼ごっこ」姫は手を叩いて喜んでいる。

「何を仰います。地獄の獄卒の掟として、鬼ごっこは禁じられているのです。しかし私は酔った勢いで、ついその孫娘の可愛さに誘われるまま、鬼ごっこをしてしまったのです。挙げ句の果てに……」 「負けちゃったのね」姫はニコニコしている。赤鬼は涙を拭い、がくりと頭を垂れた。

「それだけではありません。下戸の私が酒を飲んで鬼ごっこをしたのがいけなかったのでしょうか。すっかり悪酔いしてしまったのです。赤鬼である私が、真っ青な顔をして地獄に戻りましたところ、上司の青鬼に見つかってしまったのです」

「あなた、運も悪いのね」姫の言葉に、赤鬼はちよつと言葉が出なかった。

「上司の青鬼は、私の顔を見るなり、いつもは青い顔を真っ赤にして怒り始めました。正に鬼の形相です。『お前は何をやらせてもだめな奴だ』と言われました。確かに同期生の鬼達は墨縄や、L型定規、槍かな、のこぎり等を使って人間を上手に捌いてみせるのです。でも、わたしは今だに墨縄ひとつ、うまく扱えないのです」

もち丸とつき丸は餅をつき終わった。高杯に丸めた餅を載せている。河原のあちこちには小さな石が積み上げてある。おそらく親に先立って死んだであろう子供らが、積み上げたものと思わ

れた。もち丸とつき丸は、それらの積み石の前に餅を供えていった。やがて赤鬼の傍に来て餅を食べるように勧めた。

「清めの餅じゃ。食べなされ」

赤鬼は丸餅をひとつ口に入れた。なぜか心がしんと静まり返るようだった。

「あなたが空から落ちて来たのは何か訳があるの？」 姫が尋ねた。

「正直に申し上げます。私は自ら身を投げ出したのです」

まあ、と姫は口に扇をあてた。

「あなた、まだお若いのでしょうか？」

「はい先日、二百歳になったばかりです」 赤鬼は姫を見つめた。姫もまっすぐ赤鬼の眼を見つめた。

一なんとと言う美しさ、愛らしさー

赤鬼は思わず見とれてしまった。自分の頬が赤くなっているのに気がつき、彼はあわてて眼をそらした。しかし、もともと肌の色が赤いので赤面している事は誰にも分らない。

さっき食べた餅は、赤鬼の体の隅々まで清めてゆくようであった。

「姫様、私たち鬼の一番大切な仕事をご存知ですか？ それは地獄に墮ちて来た人間達を怖がらせることです。しかし、私にはそれがどうしても出来ないのです。人間達は私にすがりつくのです。助けてくれと泣きわめくのです。私が躊躇していると、先輩の鬼達が人間を切り刻み、地獄の釜に放り込みます。私はぼんやり見ているだけです。私は不器用で本当に何も出来ない鬼なのです。鬼として何も出来ない私の命なんか……いっそ、蟻一匹の命の方が貴いかもしれません」

姫は澄んだ瞳で赤鬼を見つめた。

「ではお訊きしていいですか？」 赤鬼は、こくりと頷いた。

「あなたにお訊きします。蟻より軽いあなたの命が、この地獄に墮ちた人間達を無限に苦しめるのですか？」 姫は続けて訊いた。

「この地の人間達の死は、蟻より軽いと言うのですか？」

「私は、わたしは……」

赤鬼はこらえきれず、ワツと泣き出し、地面にひれ伏した。

「私はそれでも出来損ないの鬼として生きるしかないのです」

泣きじゃくる鬼を前に姫は何か思案していたが、やがて持っていた扇をゆっくりと広げた。すると、扇からおぼろげに渦の様な気配が立ち上り、やがてそれは正装した女官の姿となった。女官は応えた。

「はい、陰陽師合同庁舎受付でございます」

姫はその女官に話しかけた。

「安倍の晴明さんにつないで下さい」

「かしこまりました」 女官はそう応えると扇の上から、すう一つと姿を消した。代わって扇の上に現れたのは、恰幅のよい脂ぎった顔をした中年男性である。

「これは、これは、かぐや姫様、お久しぶりでございますな、ウワッハッハッ」

よく見ると彼の後ろには、高価な花や珍しい果物等が山のように飾られている。たいそうな出世振りと見える。

「あなたにお願いがあるのです」

「何なりとお申し付け下さいませ、姫様」

安倍晴明は自信たっぷりに扇の上で胸を反らせている。姫は小声で何かを話した。とたんに安倍晴明の顔が曇った。

「それは難しゅうございますなあ」と考え込んでいる。やがて何か思いついたらしい。ポンと手を打ち「では、こういたしましょう」と姫にささやいた。

「なお、あの方には私の方からお願いしておきますので。姫様、これにて失礼致します」

安倍晴明の姿が消えると、姫は扇をゆっくりと閉じた。そして情けない姿の赤鬼にキツとした瞳を向けた。

「赤鬼さん、あなた鬼として生きるのね？」

思わぬ強い口調の姫の言葉に、赤鬼はハッと顔を上げた。

「もち丸、つき丸、あの者をここへ連れて来なさい」姫は扇で河原の向こうを指し示した。やがてもち丸とつき丸は、一人の痩せこけた老人を連れて来た。

「赤鬼さん、このおじいさんを殺しなさい」

姫は錦の袋から短刀を取り出し、赤鬼に突きつけた。

「この刀で殺しなさい」赤鬼は震える手で短刀を受け取った。おろおろと老人の前に歩み出た。赤鬼は柄を握り、諦めたように鞘から短刀を引き抜いた。ぎらりと抜き身が光る。赤鬼は老人の肩をつかんだ。短刀を持つ右手がわなわたと震える。それでも彼は刀を持った右手を、頭上高く持ち上げた。その時だった。

「あっ、あなたは」赤鬼は老人の顔を見て驚いた。目の前の老人は、あの田植えを手伝った老人だった。

「どうしてあなたが地獄へ……あのお孫さんはお元気ですか？」老人は答える気力もないほどに弱り切っていた。そこへ彼の背中に、姫があらん限りの声で罵声を浴びせかけた。

「さあ、どうしたのです、あなた赤鬼でしょう。ひと思いに殺しておしまいなさい」

赤鬼は泣いた。その赤い頬は涙で濡れた。

「そうだ、わたしは赤鬼だ。今まで幾千のいのちを殺める事に手を貸して来た、私は赤鬼だ」赤鬼は老人を見つめた。そして力の限り、満面の笑みを浮かべた。彼は笑顔で泣いた。

「ほら、怖くないでしょう。すぐ済みますからね」そう言って赤鬼は渾身の力を振り絞った。

「えいっ」

刀を老人めがけて振り下ろした。次の瞬間、刀は宙を舞った。老人は消え失せた。赤鬼は勢い余って転がった。ふと、傍らを見るとさっきまで老人のいたところに、仏像が一体立っている。仏像は眩いばかりの金色に光り輝いている。かぐや姫は膝をつき、その仏像に両手をあわせた。

「帝釈天様、ありがとうございます」

傍らにいた、もち丸とつき丸は「帝釈天様、なんのお供えもございませんが、これでご勘弁下さ

いませ」と言い残すと、地獄の釜の火炎の中に身を投げ出した。焔はぼうっと兎達を焼いた。帝釈天様はその焔をひと掴み、手の中に入れた。それを口元に寄せてふうっと息を吹きかけると、それはひと筋の雲となった。雲は月めがけて飛び去ってゆく。

帝釈天様は姫に声をかけた。

「姫、もう、よろしかろう。月へお戻りなさい。この赤鬼は、修行のため人道へ戻らせましょう」

かぐや姫は両手を合わせたまま、静かにうなずいた。帰りの牛車に向かって歩き始めた姫は、一度歩みを止め、振り返った。赤鬼はまだ泣きべそをかいている。かぐや姫は赤鬼に声をかけた。

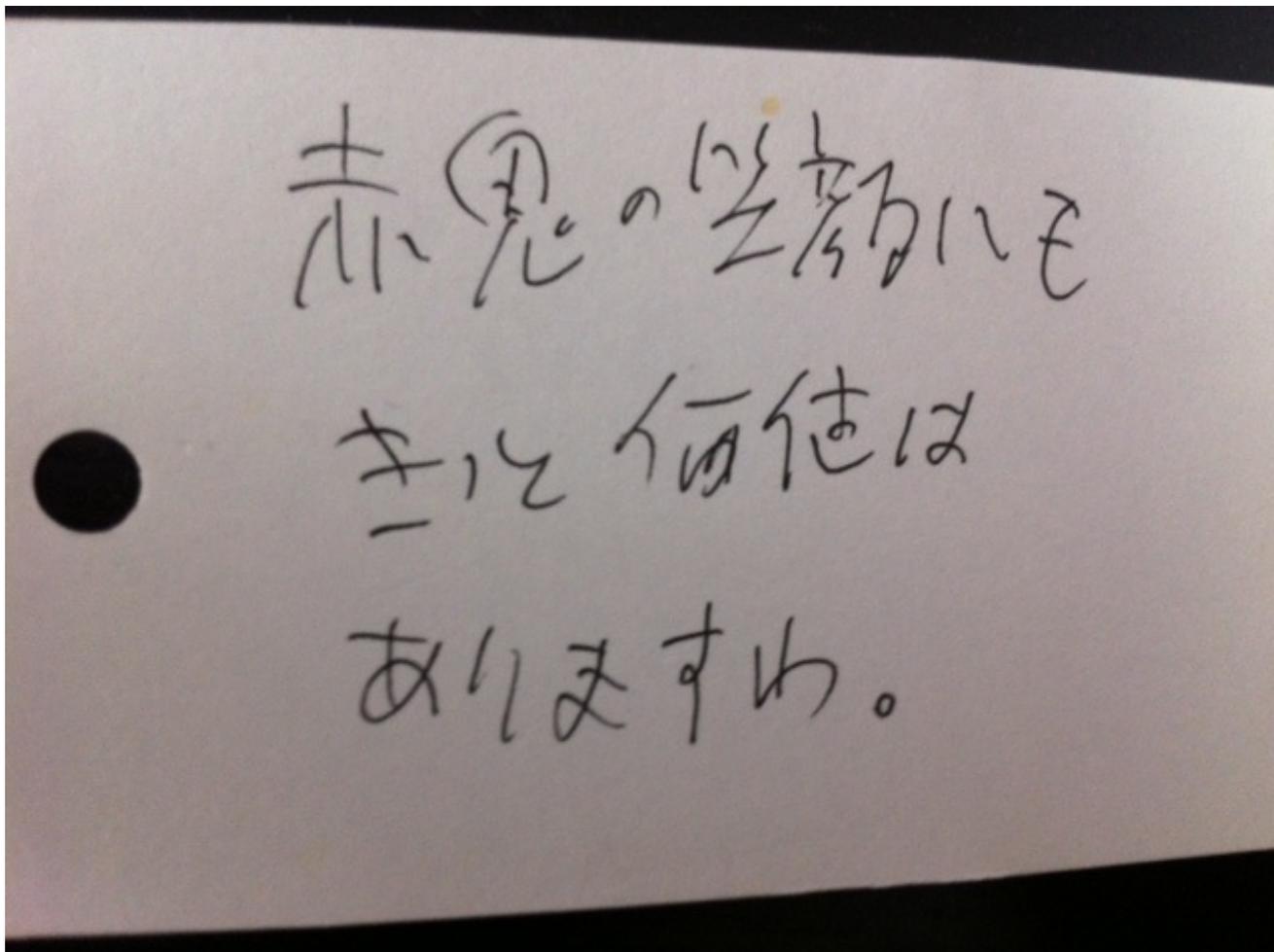
「赤鬼さん、あなたの笑顔、きっと価値はあります」

地獄の炎はなおも燃え続けている。かぐや姫を乗せた牛車は白い雲に載って、ふわりと天空へ昇って行った。牛車が去った川原には、爽やかな初夏を思わせる蓮華の香りが漂っていた。赤鬼は、どこか儂さをたたえた残り香を、いつまでも、いつまでも聞いていた。（了）

第二部 メイキング（特典画像つき）

★物語のきっかけ

この物語をつくろうと思ったとき、僕の前にあったのはたった一行のセリフだけでした。



(僕の文字は象形文字でございます、ときどき、自分で書いた文字がわからないことがあります。)

「鬼の笑顔にも価値はありますわ」

当初から

「鬼とかぐや姫が人生について語り合う」みたいな話を書いてみたい、と思っていました。僕がリストラに合い、やむなくアルバイトをしていたときのお話です。店に配属されてきた新入社員がいました。それがY君でした。バイト先は接客業です。客の多いときなどは、マニュアル通りではない、臨機応変な対応を迫られます。彼はそういう機転を利かせることが苦手な様子でした。店長以外に、先輩社員達が三人いました。彼らも二十代の若者です。しばらくはY君の面倒をみていましたが、やがて

「あいつに教えてもムダ、めんどくさい」とばかりに、あまり指導教育をしなくなりました。配属されて半年ほど経ち、Y君もいろいろと悩みを抱えているようでした。ちょっと煮詰まってきたな、と思った僕は彼に

「今度の休み、一緒に飯でも行こうや」と誘いました。

「ありがとうございます。でも僕、その日は先約がありまして」

そう言って彼はニッコリ笑い、なぜか僕に自分の名刺を差し出しました。

「これ、持っててください」

僕は名刺を受け取りました。

僕が彼を見たのはそれが最後でした。

次の休みの日、彼は自ら命を絶ったのです。職場にいた僕たちはもちろん、大変なショックを受けました。僕は彼から貰った名刺を見つめました。

悔しかったのです。

僕の二十年に及ぶ営業マン経験から言えるのは、彼は営業マンとして、接客のプロとして、実は最高の武器をもっていたということです。

それが「100万ドルの笑顔」でした。

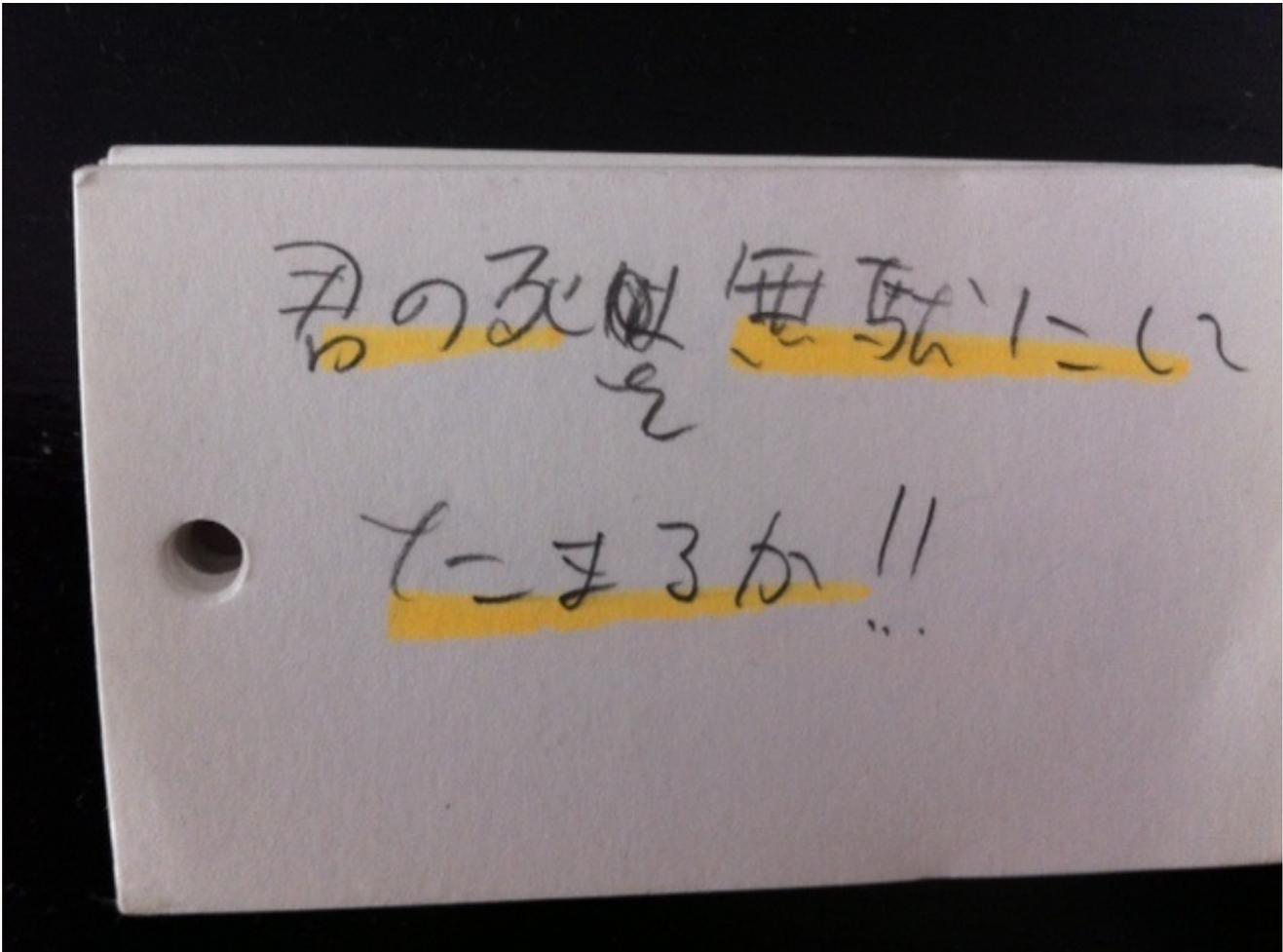
彼の笑顔は、誰をもハッピーな気分させます。どんな客の心もリラックスさせます。警戒する客の心をやんわりと開かせます。

その笑顔は彼にしかできません。あんなに屈託のない笑顔を持つ若者を、僕は今まで見たことがありません。それほど貴重な笑顔でした。

もっとじっくり育ててやれば...

彼のために何かできる事はなかったのか...

彼が世を去ってから何年か経ち、僕の記憶の中にある彼の笑顔を、このまま風化させる訳にはいかない、と思うようになりました。物語の中で、彼の「100万ドルの笑顔」を記録に留めておこう、と思ったのです。



僕のような世の中に対して何の役にも立たない人間が、のうのうと生きているのです。

人生とは不条理なものです。だから、なおさら
「君の死を無駄にしてたまるか！！」と思ったのです。

ロケ地は地獄？！

★ロケ地は地獄？！

小説を書こうと思った時、一番書きやすい方法は？と考えました。

僕は映画ファンです。

真っ先に浮かんだのが、

「そうだ、映画をつくるみたいに書けばいいんだ！！」という発見でした。

僕の処女作「たったひとりのアポロ13」は、この手法で書かれました。今回も同じ手法で行こうと思いました。

この方法は読者にイメージが伝わりやすい、まさに、映画のように風景を思い描ける、というメリットがあります。しかし、書く側にはかなりの負担があります。それこそ、一人で一本の映画を撮るようなものです。セットを組んだり、ロケ地を選んだり、衣装やキャスティング、小道具の用意まで、一人でやる訳です。

まず物語の舞台を決めなくてはなりません。セットを組んで、室内で撮影するのか？

それともロケ地を探すのか？そこから始める訳です。

今回の舞台は屋外、しかもロケ地は「地獄」と決めました。

でも、あんなところ行ったら、生きて帰ってこれません。そこで、まともな資料を探す事になります。

最も重要な資料として注目したのは、滋賀県聖衆来迎寺に伝わる、「六道絵」でした。

(下図は滋賀県聖衆来迎寺に伝わる国宝、六道絵から、地獄絵です。)



その他、十二世紀に描かれた、「地獄草子、餓鬼草子、病（やまいの）草子」を参考にしました。そこには地獄の実に詳細な描写、そして、なにより、平安期に生きた人々のリアルな姿がありました。

（下図は餓鬼草子より）



地獄は8階建てだった！！

★地獄は地下8階建て？！

初めて地獄草紙を見たときは、衝撃でした。

何が驚いたって、その圧倒的な絵師の表現力、そして地獄を具体的にイメージした豊かな想像力に、驚嘆したのです。

地獄草紙は何種類か現存しております。

僕が目にしたのは、滋賀県の聖衆来迎寺（しょうじゅらいごうじ）に伝わる、国宝「六道絵」の中の地獄絵でした。

六道とは①地獄 ②餓鬼 ③畜生 ④修羅 ⑤人道 ⑥天上の六つを指します。

地獄を具体的なイメージで語ったのは、恵心僧都源信（えしんそうずげんしん）という平安時代中期（942年生、1017年没）に活躍した天台宗のお坊さまです。

このお坊さまが書き記した「往生要集」の文面から、絵師が想像を膨らませて描いたのが「六道絵」という訳です。

この「往生要集」によると「地獄」という場所は、地下の深あ〜い、深あ〜いところにあるというのです。

「ここは地獄の一丁目」なんて言い方がありますが、地獄はなんと、地下一階から地下八階まである、というのです。

（写真は地下8階の阿鼻地獄の様子です。）



それはまさに「地獄の苦しみ」がフルコースで用意されている、8階建てのデパートみたいなも

のです。

この地獄デパートは、下に行くほど、キツ〜い苦しみが味わえる事になっております。（僕はご免被りたいですが）

一番下の8階は、最も苦しい責め苦を味わえる所です。ここは阿鼻地獄、または無間地獄と呼ばれます。

（下図は同じく阿鼻地獄の様子）



さて、この地獄デパートの地下二階にあるのが「墨縄地獄」（こくじょうじごく）と呼ばれる所です。

僕が最も興味を引かれたのが、ここでした。

なぜなら、ここで鬼達が大工道具を巧みに操っていたからです。



「これは使える」と思った僕は、主人公の「笑顔しか取り柄のない、できそこないの赤鬼」が、ここで「勤務」している、という設定にしました。

「墨縄」とは、材木を切りたいところに、目印をつけるための糸のことです。糸に墨を染み込ませて、使います。

この道具、実は21世紀の現代でも、「墨つぼ」という名前で、建築現場で大工さんが使っております。

(鬼が人間に切断面を記すために墨壺をつかっています。左側の青鬼にはL型定規がみえます。)



実は僕はこの「墨つぼ」を実際に使った事があります。

住宅営業マンを一度クビになり、それでも建築の夢を諦めきれず、職業訓練校で半年間、木造住宅について学びました。

そのときの実習で墨壺を使った事があるのです。

地獄絵や、他の絵巻に描かれた大工が行っている、そのままの作業でした。

(下図は、後の時代に描かれた大工の姿です。使っている大工道具が、上の地獄草紙で鬼が使っている道具と同じである事に注目です。手前の大工は墨付けという作業をしています。はしごを上る大工の腰にはL型定規がみえます)



糸をピンと上に持ち上げ、弓を引く要領で指をサッと離します。うまくいけば、木材にパチンと糸が当り、綺麗な直線が印されます。

ところが、僕ときたら、全くの不器用でした。

どうやったらこんなにうまくカーブが描けるのか？というほど、僕が墨付けをすると、線が曲がります。

なかなかうまく、直線が印せません。

その経験があったので、主人公の赤鬼君には

「私は墨縄ひとつ、うまくあつかえないのです」というセリフを語ってもらいました。

(下図は鬼が「ちょうな」と呼ばれる大工道具を持っています。)



鬼とは何者か？

★鬼とは何者か？

物語に登場させる赤鬼を描くために、「鬼」そのものについて調べなくてはなりませんでした。資料を調べて行くうちに出会ったのが

「鬼の人類学」本間雅彦著（高志書院1997年）という小冊子でした。

著者は新潟県佐渡郡にお住まいの元高校教諭をされていた方です。佐渡地方に伝わる鬼伝説を大変分かりやすく伝えてくれていました。

この本の中で、いにしえの人々が鬼と感じたのは、渡来人、先住民、両方が異民族への恐れから、お互いがお互いを鬼と認識したのであろうと推察しています。

この本の中で面白いエピソードがありました。

佐渡ヶ島両津市黒姫地区、その名も「鬼の田」と言う地域のお話です。



（佐渡島には鬼の付く地名が多くある事が分ります）

その昔、山本勘兵衛さんという庄屋さまが、あるとき赤鬼を助けました。すると、そのお礼返しに

「字（あざ）宮の原と言う場所にある山の田んぼを、夜中のうちに鬼が来て植えてくれた」という言い伝えがあるのです。その鬼は赤鬼で「5月4日にやってきた」と、なんと日付まで伝えられているのです。

それ以来、山本家の節分では

「福は内、鬼も内」と唱えているそうです。

更にその鬼を唄ったとされる民謡まで残っています。

♪長者のお田植、鬼酔うてぐんにやり、ぐんにやり♪

なんと、田植えをしてくれた鬼を酒でもてなしたというのです。しかも、鬼が酔っ払って、ぐんにやりしている。

これはおもしろい！と言うわけで、このエピソードはそっくり私の小説のなかで使わせてもらう事にしました。

★鬼の年齢

さて、鬼のキャラクター像について僕は「若い鬼」にしたいと思いました。では、何歳か？そこで鬼の年齢について調べることになりました。

平凡社名作文庫「鬼と仏と人間の小さな物語；宇治拾遺物語」（川端善明著）という本のなかに「吉野山の鬼」というお話がありました。

「人に恨みを残して死に、恨みの相手を子孫の代まで根絶やしに殺し、それでも恨みの炎が消えず、消えない炎が自分の身を焼きまする」

という凄まじい青鬼が登場します。

この鬼が年齢四、五百歳と記されていました。

「しめた！」と思いましたね。

ここを根拠にして、若い赤鬼の年齢は二百歳という設定にしました。



★竹取物語を読んできた。

小説の登場人物として、当初、キャスティングが決まっていたのは「赤鬼」と「かぐや姫」の二人だけでした。まずは、かぐや姫について基礎知識をつけようと「竹取物語」を改めて読んでみようと思いました。

日本人なら誰しも子供の頃におとぎ話として「かぐや姫」のお話を聞いたはず。

さっそく図書館で「竹取物語」を探すと、実に沢山の現代語訳や、学術書に出くわします。その中から僕が見つけたのは、なんと、あのノーベル文学賞作家、川端康成「大先生」が現代語訳した「竹取物語」でした。



この本は、日本文学を世界に紹介したドナルド・キーンさんが企画したもので、英語訳もついております。美しい挿し絵も魅力的でした。有難く川端康成先生の現代語訳を拝読いたしました。改めて読んでみると、びっくりしました。こんなに、面白いおはなしだったとは。実にテンポがいい。しかも、ユーモアや、貴族社会への風刺のセンスも抜群。お話がダイナミックに動きます。それこそ、まるで映画をみているようです。

実際、1987年には市川崑監督によって「竹取物語」が映画化されました。かぐや姫に沢口靖子、竹取りの翁役に、三船敏郎。お母さん役に若尾文子さん、という豪華なキャスティングです。

衣装も美しいですし、牛車も登場します。映画作品として楽しめる秀作です。

「竹取物語」はおおよそ、西暦905年ごろには成立していたようです。物語のラストシーンで「富士

山から煙がたなびいている」という描写があります。富士山が休火山になったことが初めて記録に現れるのが西暦905年頃なのです。ですので、それ以前に物語は描かれたはずです。

なお、「竹取物語」はこれほど有名にもかかわらず作者は今だ不明です。ただ、漢文の教養がある、男性の作者ではないかという説が有力です。

かぐや姫は何を着ていたか？

★かぐや姫は何を着ていたか？

さて、この魅力的な、この世のものとは思えないほどの、絶世のカワイイお姫様「かぐや姫」
映画的に物語を作ろうとする訳ですから、衣裳を決めなければなりません。

彼女は何を着ていたか？

「カンタンじゃん、十二単だろ」

僕もそう思っていました。

これが一筋縄では行きませんでした。まさに悪戦苦闘。

平安期のお姫様がどんな服を着ていたのかを調べるだけで、膨大な資料と格闘するハメになりました。



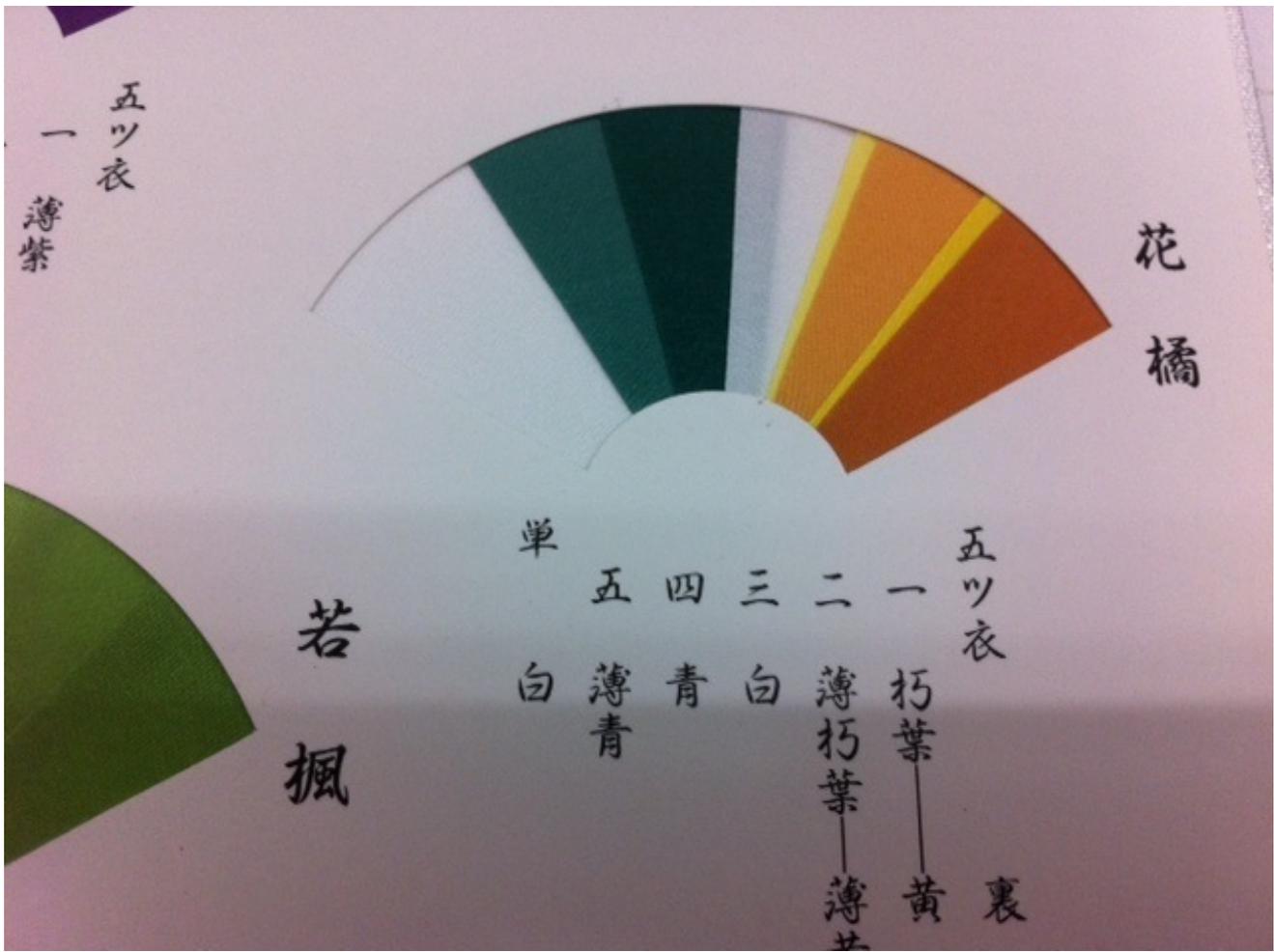
僕はこの物語の季節を初夏と設定しました。

それは神戸新聞の文芸欄に、もし運良く掲載されるのなら、それは7月初旬とわかっていたからです。

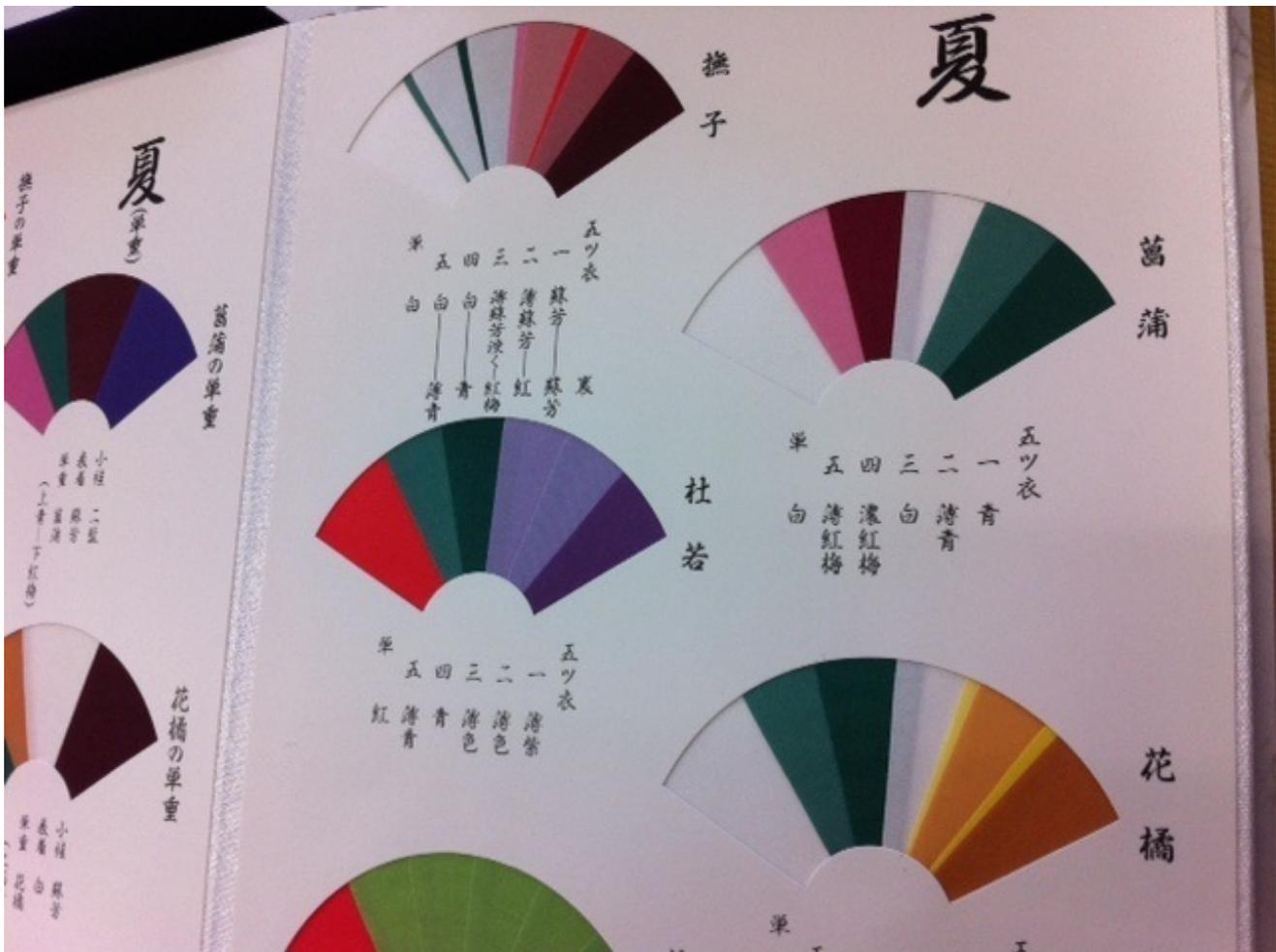
それで初夏にふさわしい衣裳を探す事になりました。

手っ取り早く結論を言いましょう。

「花橘」と呼ばれる、五色の着物を重ね着するコーディネートに致しました。専門用語でこう言う色の配色の事を「襲（かさね）の色目」と言います。



「襲の色目」は約二百種類のバリエーションがあると言われ、しかも季節によって使える配色が決められていました。「花橘」は初夏に使える爽やかさを感じる配色でした。



なお、身分によって使える色がきめられています。これを「禁色」（きんじき）と言います。間違っ、天皇しか使ってはいけない色を作品中に使ってしまったら、それこそ物笑いのタネですね。

さて、生地は絹織物で作られ、裏地はありません。この裏地のない着物を「単」（ひとえ）と呼びます。

下は赤い袴を履いています。神社の巫女さんがいますよね。あの姿に、どんどん重ね着してゆくようなイメージです。

因みに、十二単に代表される服装は、正式には「女房装束」と呼ばれます。極めて単純にいうと、高貴な身分の人ほど、「多く重ねて、長く引きずる服」をきておりました。二十枚重ねて着たという記録もあります。



(画像が横を向いてしまいました。いわゆる十二単です。貴族女子成人式(これを裳着と呼びます)の正装です。髪型はおおすべらかしと呼ばれます。手には檜製の扇を持っています。)

なお、「かぐや姫」は竹取のおじいさんが、見つけて拾ってきた子供ですから、高貴な身分ではないわけです。しかし、竹取物語では、後におじいさんは、竹林で「黄金」を度々見つけるようになり、大金持ちに成り上がります。貴族のような大きな寝殿造りの家も建てて、それこそ、貴族のような暮らしを始めます。



(竹取物語絵巻より。御殿に住むまでに成り上がった竹取りのおじいさん一家です)

そのため、「かぐや姫」も、貴族達が着るような服装をしていたと考えられるのです。

また、当時の貴族の女性達にとって、扇は必需品でした。夏には紙を貼った「かわほり扇」と言うものを使いました。冬は檜で作った扇を持ちます。

また、当時の女性が外出する時には、お守り（首から掛ける懸け守りと呼びました。）、守り刀も必要であろうと思い、作品の中で使いました。

★かぐや姫は実在した？！

平安期の資料を調べている時に「かぐや姫の結婚一日記が語る平安姫君の縁談事情一」（繁田信一著）と言う本に出会いました。

衝撃でした。

なんと「かぐや姫」と世間で呼ばれたお姫様が実在したと言うのです。

その女性は「藤原千古（ちふる）」と言います。生没年は確実ではありませんが1011年頃の生まれであろうとされています。

「竹取物語」が成立してから100年ほど後のことですね。

なお、平安期の常識として、よほどの上級貴族でない限り、女性の名前や生没年は、ほぼ記録されないのです。あの有名な「清少納言」も「紫式部」も実は「あだ名」です。

本名は今だにわかっておりません。とても男尊女卑の世の中であったようです。

しかし、学問の才能がある女性達には、宮廷での宮仕えという道が開かれていました。天皇、皇后、のお側で家庭教師の役割や、身の回りの世話をするのです。

この宮中で働く女性職員たちを「女房」と呼びました。未婚でも女房と呼びます。先に述べました、「女房装束」と言うのは、彼女たち女官の制服だったのです。清少納言も、紫式部も、宮中にお仕えする、才能溢れる女房達でした。なお、彼女達は宮中で住み込みで働きました。



さて、藤原千古です。彼女の父親は貴族でした。父親が五十歳を過ぎてから生まれた姫君でした。父親にしてみれば、まさに目の中に入れても痛くない、可愛い姫でした。

もう、デレデレです。

彼女の望むものは、何でもOK。

甘やかして放しで育てました。父親は自分の娘を「かぐや姫」と呼ぶほどだったのです。

この父親の彼女への溺愛ぶりは、ほとんど常軌を逸していました。

寛仁3年12月9日（1020年1月6日）には、

「荘園、屋敷など”チリーつに至るまで”彼女に相続させる」という書状を書きます。

この常軌を逸した愛情を示した父親の名前は、藤原実資（さねすけ）といいます。実はこの実資、平安期を研究する人にとっては、大恩人とでもいいたいでしょうか、とても大切な人物です。なぜなら、彼が事細かく書き残してくれた日記が、現代まで伝わっているからです。

この貴重なタイムカプセルのような記録のお陰で、平安期の貴族や、都のリアルな立体像が浮かび上がってきます。

その日記「小右記」はまさに第一級の研究資料です。

藤原千古はその後、結婚し一児をもうけますが、長歴2年（1038年）に亡くなったと言われています。恐らく、まだ二十代の若さであったと思われます。父親、実資より早い死でした。

実資は最終的に従一位、右大臣という、とんでもない高い地位まで上り詰めます。まあ、今で言えば、内閣官房長官ぐらいでしょうかね。

彼は永承元年（1046）90歳で没します。当時としては驚異的な長寿を全うしたのでした。

さて、「かぐや姫の結婚」という本は元ネタが「小右記」なのです。その「小右記」の中に、とても興味深いエピソードがあるのです。

藤原実資が愛する幼い姫君、千古を膝に載せて、新しく作らせた「牛車」を自邸の庭で試し乗りました、と言うのです。

「牛車の試し乗り！！」

これは使えると思いました。

牛車を試し乗りしてみよう！

★牛車を試し乗りしてみよう！

「牛車を試し乗りするのが、何がそんなに面白いのか？」と現代人は考えますね。

では、想像を膨らませ、平安期にタイムスリップしてみましょ。

藤原実資の邸宅に、いま、僕たちはいるものと思ってください。

この当時の貴族の邸宅は、どんな大きさだったか？が重要です。

邸宅の庭には、大きな池が見えます。川が流れ、そこに船を浮かべて、楽師に音楽を奏でさせて遊ぶ、というのが貴族の遊び方のひとつです。

(池に舟を浮かべて、楽師が管絃を奏でています)



何人も楽師を載せることができる船。それを浮かべて移動させる事ができる大きさの池と川の流れ。それがひとつの邸宅の庭にあるのです。



7の産物山は、なかにま、はし

今で言えばハリウッドセレブ達の豪邸の大きさと想像できるでしょうね。そんな、とてつもない大きな庭があったなら、牛車の試乗といえども、結構な距離を移動できた、長い時間楽しめたと想像できます。

(寝殿作り内部はこんな感じ)



美しい庭や池を眺めながら、新品、最新型の牛車に、愛する姫君、千古を乗せ、

「この屋敷は全部おまえのものじゃ～！！」などと藤原実資は、はしゃいでいたのかもしれませんがね。

今でも、クルマは、ステータス・シンボルです。

ベンツS500クラスやロールス・ロイスに乗れるご身分、と言えば相当なセレブですね。

平安期における牛車は、まさにステータスシンボルでした。

なお、ここで重要なキーポイントは、牛車は当時の服装と一緒に「身分の表示である」ということです。

天皇は牛車には乗らず、何人もの人が担ぐ「輿」というものに乗りました。天皇直系の皇族は「唐車」という牛車や輿を使いました。また、貴族と言えども、下級、中級貴族では載る事が出来ない種類の牛車もあったのです。

上級貴族であれば、半蔀車（はじとみぐるま）とか、大八葉車などと呼ばれる牛車を使いました。自邸から宮中への行き帰りなどの、公用で使われました。

（下図が半蔀車です。車の横側の窓が上に開いています。これが半蔀とよばれます）



さて、僕は物語に牛車を登場させたいと思いました。「かぐや姫」が載る牛車です。

「小右記」の中で記録されている牛車の試乗。幸いにもその車は、竹で編んだ「網代車」と呼ばれる牛車でした。



(復元された鴨長明の方丈庵の網代編みです。)

竹を網代編みにします。その上から漆塗りで仕上げた車です。

半部車の牛車は、かぐや姫が乗るには身分不相応です。しかし、竹で編んだ網代車なら、かぐや姫が載るにふさわしいと思えました。

「かぐや姫の結婚」の著者、繁田信一氏も、この網代車を

「平安セレブがお買い物に使うセカンドカー」と分析しています。

★もち丸と、つき丸について

さて、牛車はかぐや姫一人で載る事は出来ません。お世話する人物が必要です。

今回の作品では、かぐや姫の周囲の雰囲気「平安時代、平安王朝の風俗に忠実である」という事に心がけました。

そういう、資料的な裏付け、事実があるからこそ、リアリティーを持ったファンタジーとして、物語が羽ばたいて行けると思うのです。

牛車についていえば、乗車する人の身分によって、付き従う者、お世話をする係の人の人数が厳格に決められていました。

これらの人を「車副」（くるまぞえ）「隨身」（ずいしん）「舎人」（とねり）と呼びます。

これらの人達は、いまでいう役所の職員の様な人達でした。出身も貴族の子弟の人達です。

かぐや姫の場合は、宮中に入出入りする貴族ではありませんから、こういう公的な人達は使えません。

そこで牛車のお付きの人は、使用人として、私人でも使う事が出来る「牛飼いの童」（わらわ）四名と設定しました。

作品中で出てくる「もち丸」「つき丸」は「もちつき」から発想した名前です。僕のお気に入りの名前です。彼らを「牛飼いの童」にキャスティングしました。

モデルは、「鳥獣戯画」に登場するうさぎ達です。

「鳥獣戯画」のコピーに、試しにマジックペンで烏帽子を描いて被せ、餅つきの杵を描き入れて見ると、これが結構イケてるのです。



彼らをウサギにしたのは、もちろん、かぐや姫が月に住む人であるからですし、昔からよく言われていた「月にうさぎがすんでいる」という、ロマンチックなお話と相性がいいと思ったからです。

実はこのお話、「今昔物語」にそのまま載っております。

平安末期の1077年頃書かれたものと思われる「天竺の部・巻五・第13話、月兎の話し」です。その昔、うさぎと、きつねと、さるがいました。彼らはなにか善い行いをしたいものだと願っていました。それを天から見ていた帝釈天様が、よぼよぼの老人に化けて彼らの前に現れます。きつねとさるは、その老人に、手厚いおもてなしをしました。ところが、うさぎは何も出来ませんでした。

思い詰めたうさぎは

「何も、おもてなし出来ませんが、せめて自分のカラダでも召し上がって下さい」と自ら炎の中に飛び込みました。

すると老人は帝釈天に姿を変えました。

「うさぎの行いは立派なものだ」と仰って、うさぎの姿が永遠に見えるようにと、月に置いたのだ、というお話です。

僕の作品に唐突に現れる感じがする帝釈天様は、このお話を根拠にしております。というか、完全なパクリですね。ハハハ。

ちなみに、僕が今年の3月に東京旅行したとき「フーテンの寅さん」の故郷、柴又帝釈天に行ってきたところでした。不思議な縁というものです。

★行列のできる陰陽師、安倍晴明

平安時代の貴族達の日常生活を調べてゆくと、どうしても避けて通れないのが、陰陽師の存在です。

映画のヒット等で陰陽師の存在はよく知られるようになりました。小説に取り上げようと思ったとき、ぼくは彼ら陰陽師が使う、呪術「陰陽道」を詳しく調べるつもりは全くありませんでした。

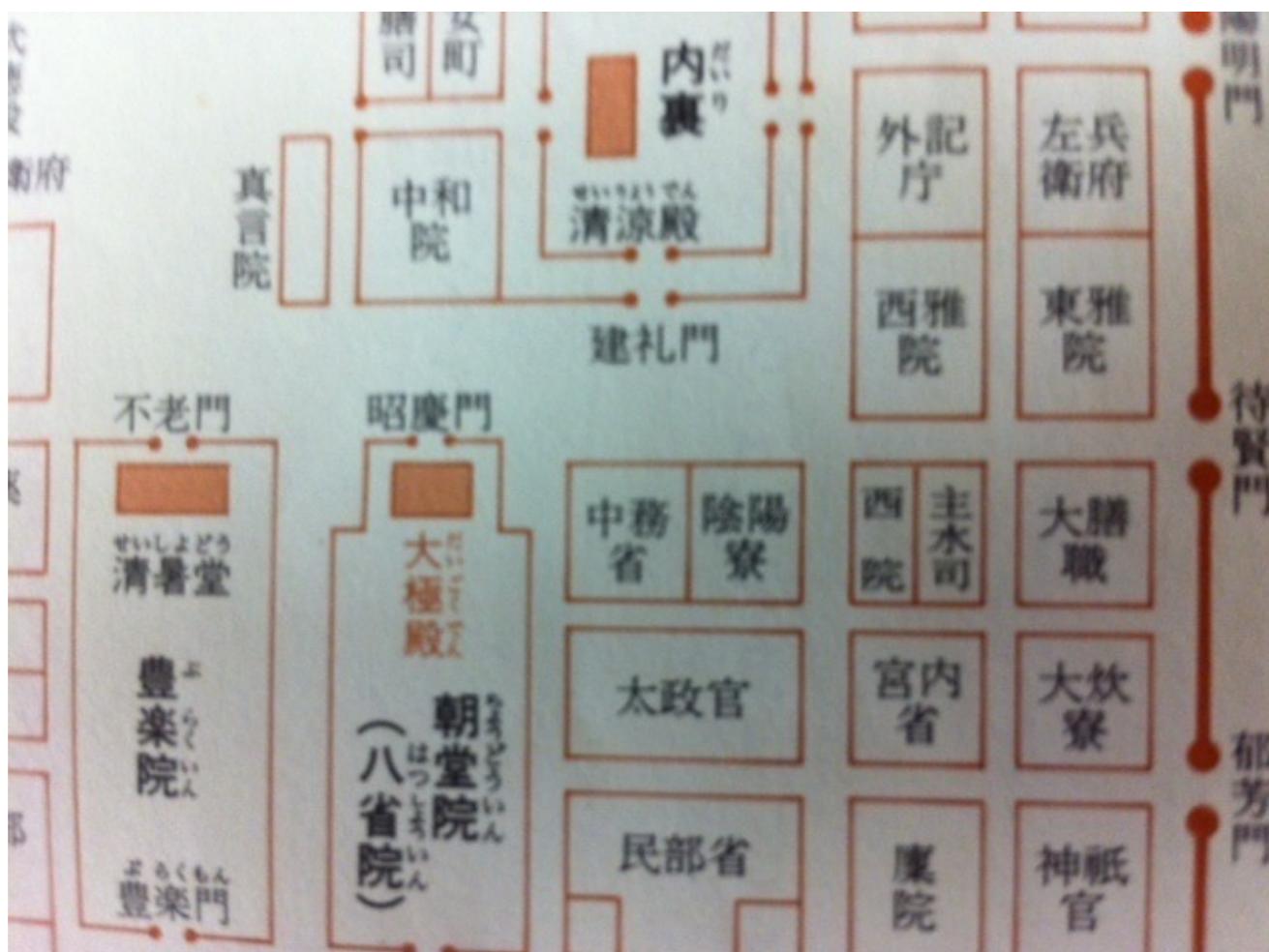
僕が何より関心を持ったのは、平安王朝における、彼ら「陰陽師」達の社会的地位でした。

彼らは一体、平安京においてどのような政治的ポジションであったのか？

実は、彼ら陰陽師はまさに、影で政治を操る事さえ出来た、重要なポジションにいました。

平安期において、陰陽師は「陰陽寮」という「お役所」に勤める、いわば国家公務員だったのです。しかも、時の支配者、天皇の比較的近くで仕事をしました。

実際に陰陽寮がある建物は、天皇がお住まいになる、内裏の近くに配置されています。



この時代、陰陽道は「唐の国」からもたらされた「最先端の科学」でした。

今で言えば「陰陽寮」は、いわば「文部科学省」に相当すると思われます。

そのお役所である陰陽寮で、陰陽師たちは最先端の科学であるところの天文学や、数々の占いで物事の吉凶を占いました。

そもそも長岡京から都の場所を移そう、という事になった時、根拠になったのは陰陽道でした。

地理的に運気の善い場所とされたのが平安京（現在の京都）だったのです。

平安京の鬼門に当る場所に上賀茂神社、下鴨神社が既に存在していた事も、都を作るには最適と考えられました。これも陰陽道の思想と合致します。

さて、先に述べた藤原実資が記した「小右記」には、ことあるごとに陰陽師に吉凶を占わせていた事がうかがえます。

こんな話があります。

実資の邸宅に、ある時、犬が迷い込みました。犬は何かをくわえています。よくみるとそれは、食いちぎられた「人間の屍体」の一部でした。



そのとき平安貴族、藤原実資は何を思い、どう行動したのでしょうか？

彼がまず取った行動は、陰陽師に吉凶を占わせることでした。

彼ら平安貴族が何よりも怖れたのは「穢れ」（けがれ）という意識でした。

平安貴族は何よりも穢れを嫌い、恐れたのです。

「姫様、そのような者と関わりますと穢れがございますぞ」ともち丸が注意を促すのはそのためなのです。

平安時代、庶民はまことに辛い暮らしを送っておりました。生きて行くのがやっとでした。

飢饉、大風、地震、大火、伝染病。人々はバタバタ死んで行きました。実は平安京は、そこら中に屍体が転がっている、ある意味、死の都でした。

有名な鴨長明の方丈記には「養和の飢饉」（1181年頃）についての記述があります。

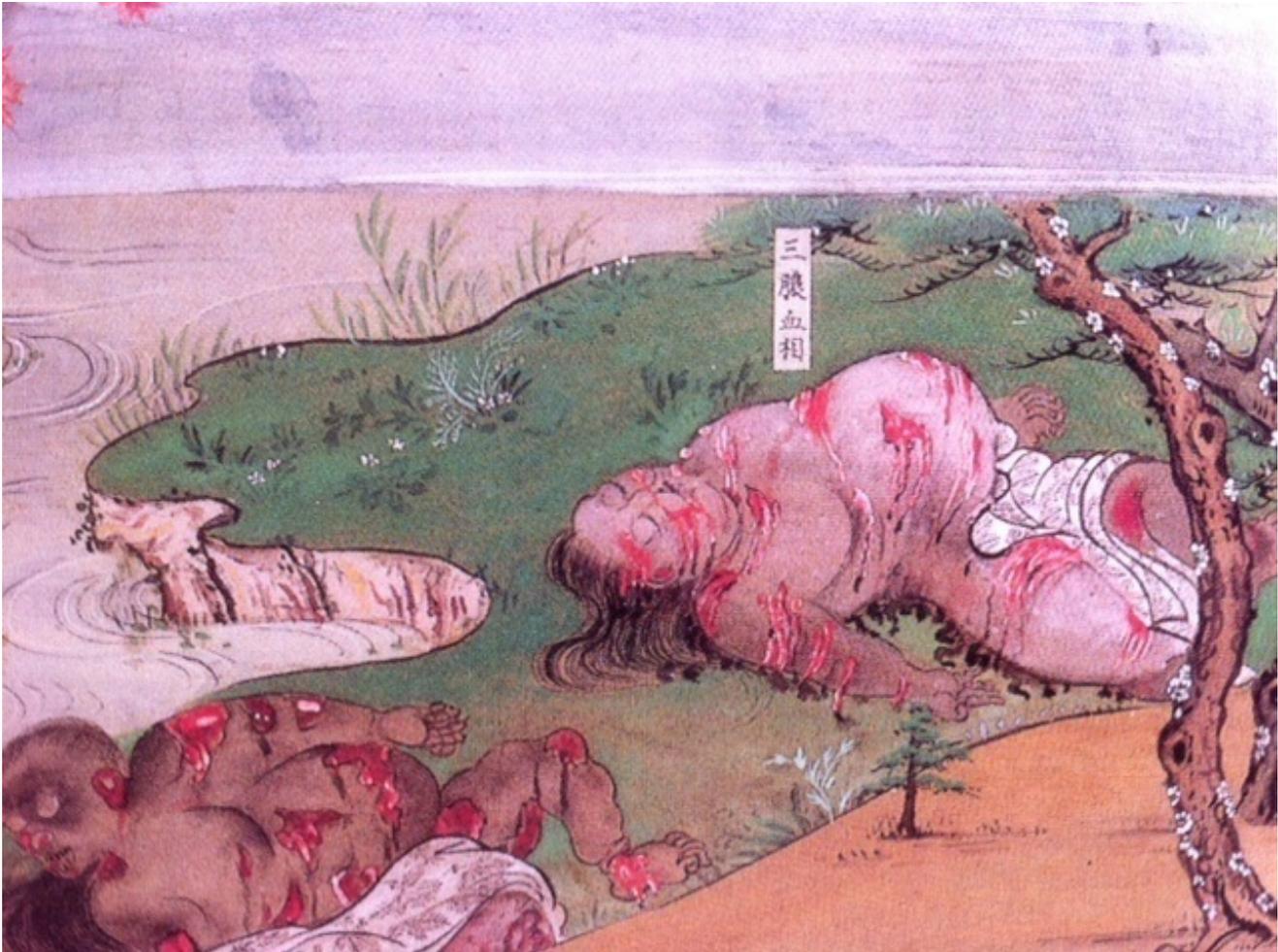
「鴨の河原には屍体が散乱している」

「平安京の死者の数は4万2300人を超えた」

想像出来ますか？ 皆さん。

かつての後樂園球場がちょうど収容人数、42337人です。

その数の屍体が京中に転がっている訳です。



この対策として、貴族達は「特に何にもしなかった」ようです。かれら平安貴族の頭の中は僕には想像出来ません。

さて、犬等が屍体の一部をくわえて、貴族の邸宅に入ってくる事を「食い入れ」といいます。そういう用語があったこと自体、頻繁に「食い入れ」があった事を物語っています。その度に貴族達は自分に「穢れ」が襲ってくるのではないかと、陰陽師に占わせました。陰陽師が占うのはそれだけではありません。よく知られる「方違え」、それに髪の毛を洗う事も、当時は特別な事とされました。

なんと貴族達は髪を洗う日までも、陰陽師に占わせていたのです。

裏を返せば、貴族の日常生活は、ほとんど陰陽師の占う結果に支配されていた、という見方も出来るのです。

こうしてみると、お役所である「陰陽寮」で陰陽師達は、かなり忙しく仕事（つまり占いですね。）をしていたであろうと想像出来ます。

それこそ「行列のできる占い所」だったわけです。

ですので、かなり、事務的に”作業”をこなして行っただろうと思われれます。

さて、陰陽師にスーパースターがうまれます。

安倍晴明です。

彼の出世は意外にも遅かったのです。

二十代から、陰陽道の才能は発揮されていた様ですが、時の朝廷からお声が掛かるのは、59歳の頃です。この時、安倍晴明は、後の花山天皇から、那智山の天狗封じの儀式を命じられます。

その後、一条天皇や、当時最大の権力者である、藤原道長の篤い信頼を得るに至ります。

最終的に彼は、従四位下、播磨守（はりまのかみ）という地位まで上り詰めます。

この「守」（かみ）という役職。今で言うと県知事に当ります。すごい出世ですね。

彼は84歳と言う、当時としては大変長生きをした人です。

こういう人物であるため、僕の作品中では、恰幅のいい、脂ぎった中高年男性として描きました。

また、大変忙しく、ひっきりなしに占いの依頼が来たであろう陰陽寮は「陰陽師合同庁舎」という風に描きました。

そこで陰陽師達は国会議員のように手篤い待遇を受け、安倍晴明のような腕利きの陰陽師達は、それこそ貢ぎ物が絶えなかったでしょう。

実は僕は、今年の三月、ネットで出会った作家さん達のオフ会に参加するため、東京にいきました。せっかくだからと、国会議事堂周辺を見て廻りました。



そのとき僕の眼に飛び込んで来たのは議員宿舎の窓でした。

あっけにとられました。

いくつかの窓には、それこそ、これみよがしに高価な胡蝶蘭がズラリと並べてあったのです。

「この人達は何を考えて政治をやっているんだろう？」

まともな人達ではない、と直感的に思いました。

僕が「鬼とかぐや姫」オリジナル版で、安倍晴明の後ろに、

「珍しい果物や高価な花」を描いたのは、このときの体験があったからなのです。

(議員宿舎です。ちょっと分りにくいですが、この窓際に胡蝶蘭がズラリと飾ってありました。)



★平安王朝の香り

平安王朝の美意識のアイコンとして「香り」は欠かせないと思いました。

当時の貴族達にとっては、案外必需品であったかもしれません。

というのも、当時はそれほど頻繁に入浴しませんでしたし、髪の毛を洗う事も、陰陽師に吉凶を占わせるほどだったからです。

ですので、髪の毛も体臭も相当に臭ったはずですよ。

そこで貴族達は、こぞって衣服に香を焚き染め、香りのハーモニーを楽しんでおりました。

このお香を「薫物」（たきもの）といいます。

何種類もありますが、代表的な物が「六種の薫物」（むくさのたきもの）と呼ばれるものです。

これは平安時代から、現代まで受け継がれた六種類のお香です。この香りを「かぐや姫の香り」に設定しました。

今回僕の小説では、季節が初夏の設定ですので、六種の薫物の中から、初夏にふさわしい「荷葉」（かよう）という薫物を選んでみました。

これは「蓮の香りをイメージさせる初夏の香り」と説明がありました。

実際に通販で取り寄せる事が可能です。

僕も早速ネットで注文して、試しに部屋で焚いてみました。

「ほう、これが平安貴族の香りかあ〜」

なんだか、幽玄の世界を垣間見る様でした。



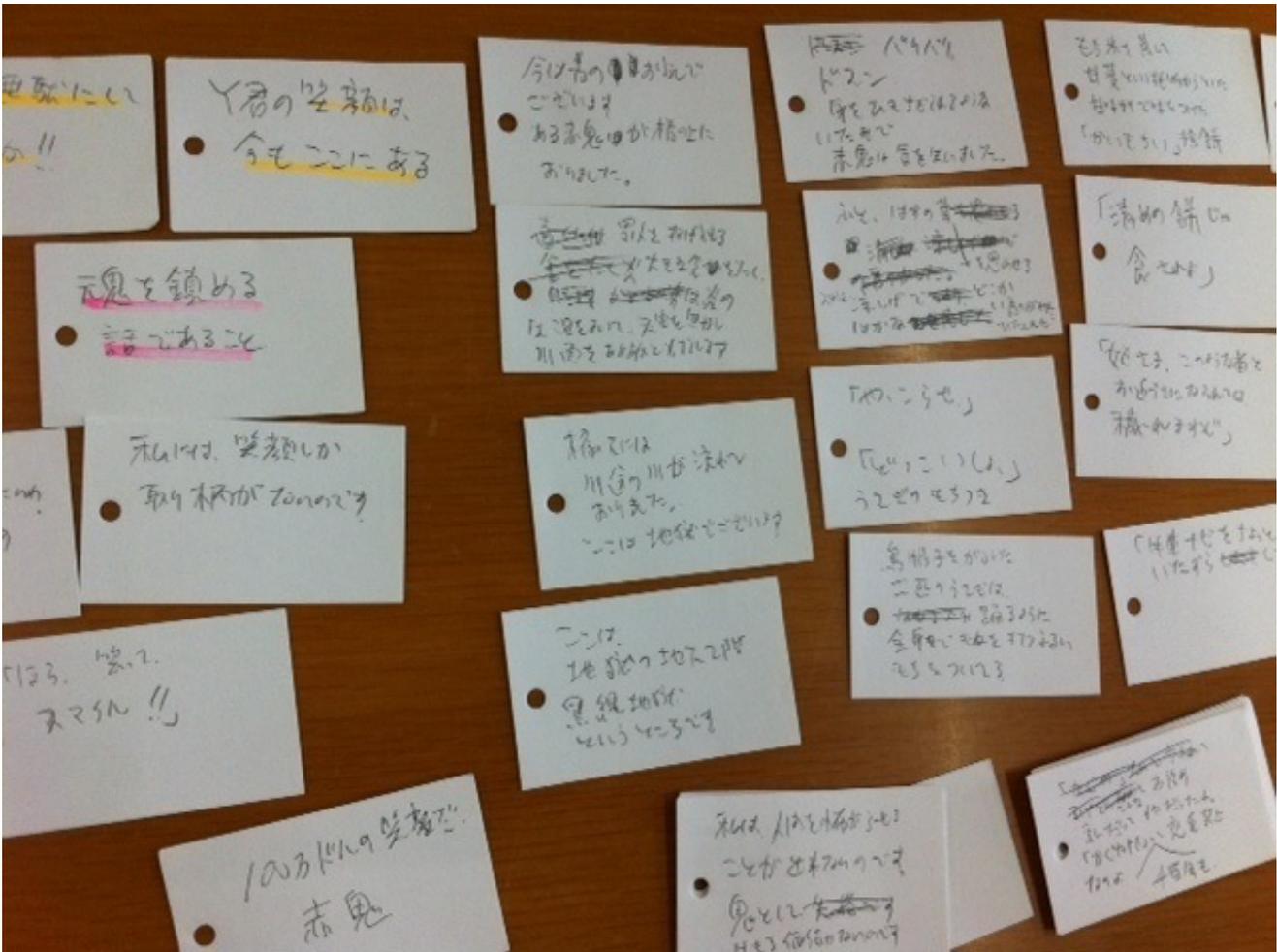
単語カードでストーリー作り

★単語カードでストーリー作り

さて、資料が揃ったところで、いよいよ作品作りに取りかかります。僕がよくやる方法は、単語カードを使う方法です。

映画を創る際には「絵コンテ」という映画の設計図をつくりませんが、その文章バージョンです。シナリオライターの方々は、こういうのを「箱書き」と呼んでいる様です。

僕の単語カード方式は、まず、思いついたキーワードや、セリフ、風景などを、思いつくままに書いて行きます。それを机の上にズラリと並べてみます。すると、どのキーワードとセリフに、関連があるか、どの順番で並べると自然か、等という事が見えてきます。



カードですから、順番の移動も自由自在。

納得いくまで、ガンガン動かします。

そして、キーワードとキーワードの間に、次はこんなセリフを入れればいいかな、と考えて、またカードに記入して、配置していきます。

こうしてストーリーが視覚的に出来上がってゆく訳です。

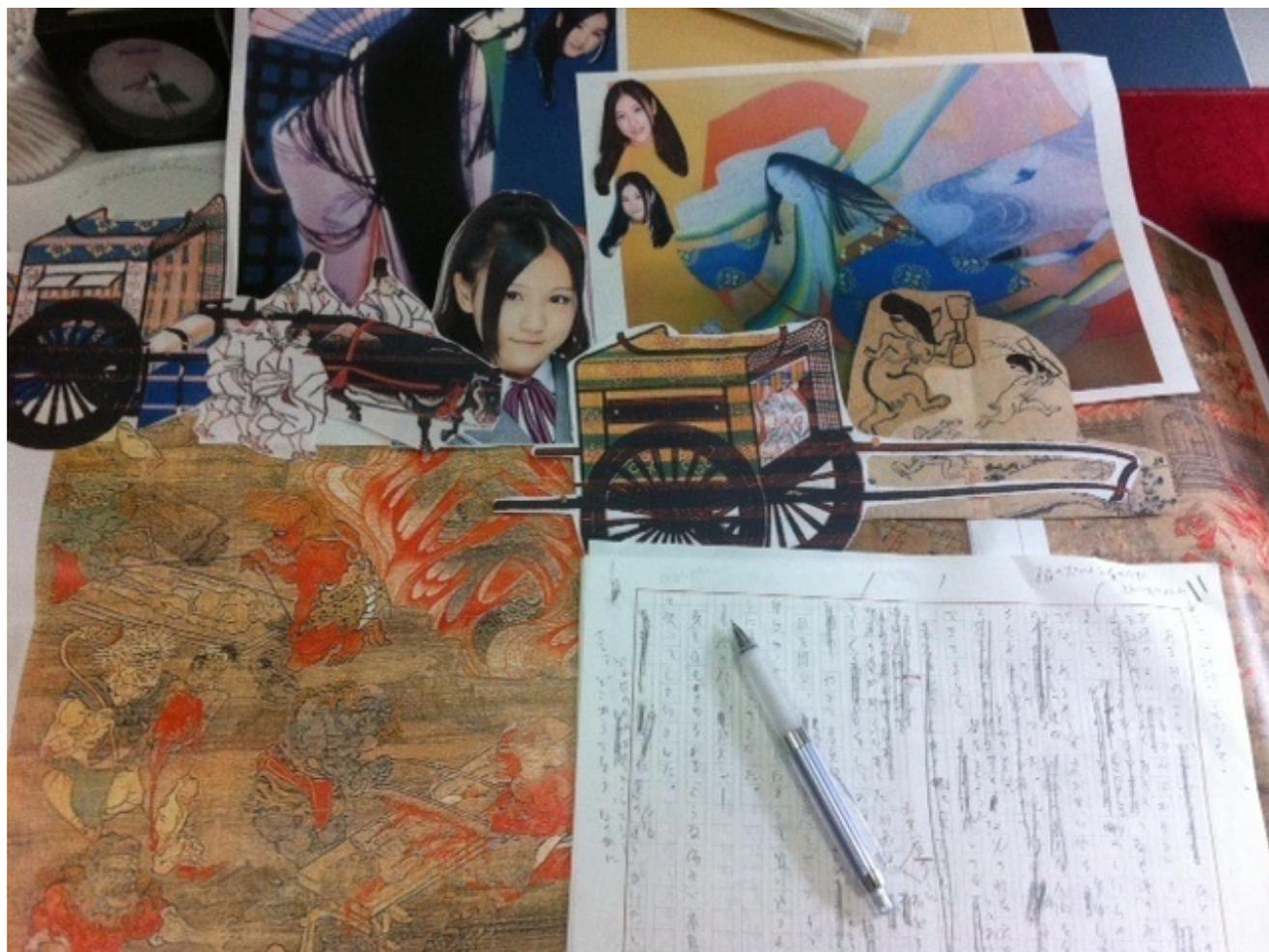
お分かりでしょうか？ 皆さん。

原稿用紙に向かうまでに、小説作りの行程は、ほぼ8割ぐらいまで終わっているのです。

さて、いよいよ、原稿用紙に向かいます。

僕は今でも原稿用紙を使います。手で文字を書くと、脳みそを直接マッサージしているような感

覚があるのです。原稿用紙と、筆記具が直接触れ合う、その感触が好きなのです。
筆記具は今のところ、3Bの芯を入れたシャープペンシルを愛用しております。
また、原稿を書いている最中も、視覚的なイメージを大切にするため、今回であれば、写真にあるように、地獄絵図や、牛車、うさぎ、などを目の前に置きながら描きました。



なお、登場人物で僕がよくやる手なのですが、実在の人物をモデルにすることがあります。
ブックオフにいて、女性、男性ファッション誌なんかをパラパラめくって、モデルになりそうな人を捜します。

今回、かぐや姫のモデルにふさわしい人として、アイドルグループ、乃木坂46の星野みなみさんを選んでみました。写真中央に見えている少女です。

趣味がバレバレですな。ハハハ。 (*^^*)ポッ

圧倒的な可愛さと、無邪気さ、その上、意外にもサディスティック。周りの空気を全然読まない、わがままさ、言い出したら聞かない頑固さ、を併せ持つ人物、としてピッタリのイメージでした。（星野さんと星野みなみファンの皆様、ごめんしてね。）

原稿が書き終わると、必ず一日寝かせます。

翌日に、前日書いた原稿を見ながら、パソコンに入力していきます。このとき、前日には気づかなかった修正したい所が見えてきます。それを修正しながら入力していきます。

パソコン入力が終わると、また一日寝かせます。

翌日、改めて入力された文章を見てみると、また修正したい部分が出てきます。それを直します

最終的に3、4回の修正を経て、ようやく作品は完成します。

やっちゃまった大チョンボ&使いたかった「おじゃる言葉」

★やっちゃまった大チョンボ&使いたかった「おじゃる言葉」

時代劇を作る時によくあるのが、時代考証ミスです。

僕も、念を入れて確認したつもりでしたが、原稿を新聞社に送った後で、大チョンボを見つけてしまいました。

それはかぐや姫の従者「もち丸」と「つき丸」です。

僕は彼らに「烏帽子」を被らせました。

これが大チョンボなのです。

彼らの名前は「牛若丸」のように「～丸」という名前ですね。

これ、実は成人式を迎えていない、子供、「童」（わらわ）に付けて呼ぶ幼名です。

烏帽子というのは、元服（成人式）を迎えて、初めて頭に被る事が許されました。

ですから、「もち丸、つき丸」という名前がついている限り、烏帽子は被せてはいけないのです。

なお、投稿版、オリジナル版ともに、今回はあえて修正しないまま掲載致しました。

さて、僕が、ぜひ是非、使いたかった言葉に「おじゃる」という言葉があります。

「～でおじゃりまする」というのは、何とも風情があって、いかにも古めかしい雰囲気がありますよね。

「使いたいなあ～」と、それこそ舌なめずりするぐらいでした。

ところがこの言葉、調べた所、室町時代ぐらいから使われ始めたようで、平安時代にはなかった言葉なんですね。

司馬遼太郎さんの「国盗り物語」のなかに、やはり「おじゃる」言葉がでてきます。戦国時代には使っていたのですね。

「ああ、使ってみたい」

あこがれはあったのですが、泣く泣く諦めました。

☆☆以下余談

天下の公共放送、NHKの教育放送で放映されている「おじゃる丸」という人気アニメがあります。

僕が、「もち丸・つき丸」に烏帽子を被せてしまった事を悔やんでいた時、たまたま、このアニメを見ました。

びっくりしました。

主人公の「おじゃる丸」さまは正に、元服前の子供の設定でした。そのため髪のもも、おかつぱ頭ですね。

何と、その頭には烏帽子が……。 \(\text{°} \text{°} \text{;}\)カゲヤネ!

「まあ、アニメだからキャラクターの造形上、こういう風にしたんだろう」と思いました。

おまけに「ヘーアンの時空からやって来た王子様」なのに、そもそも名前がおじゃる丸！！

平安時代にはない言葉です。

(@o@)おお～っ!! マンガは何でもアリか！！

なお、当時、三十歳、四十歳という、いい歳になっても元服しない人もいました。この人達は、元服式をしていませんので、髪を束ねて結うことをしません。

名前も幼名のままです。烏帽子も被りません。

これらの人を「大童」（おおわらわ）と呼びました。

★平安と言う時空に生きた庶民達

僕が今回の作品で、資料を調べている最中、胸を衝かれる様なことが度々ありました。平安時代の髪型を調べようと思った時の事です。

「歴代の髪型」（石原哲男著 京都書院）という髪型の写真集を見つけました。平安期の女性の髪型は、たったの2種類でした。

（平安時代のお姫様カット、垂髪です。）



鎌倉、室町時代もそんなに変わりません。やがて戦国時代が終わり、江戸時代に入ったところで、遂に庶民の文化が花開きます。ここで、女性の髪型のバリエーションが、まさに爆発的に増えるのです。

確認出来るだけで江戸時代、46種類の髪型がこの本には紹介されていました。

これには胸を衝かれました。

平安時代の髪型は2種類しか、記録にないのです。

それは庶民が、髪をお洒落する余裕など、全くなかった事を意味しています。

平安時代というのは「平和で安らか」とは、名ばかりの、極めて過酷な時代であったのです。

それはそうでしょう。

なにせ、平安京には4万2千300体の屍体が散乱し、人間は家畜同様に公然と売り買いされ、病気で助かる見込みがなくなれば、鴨川の河原に捨ててしまう。

どう考えても、これは生き地獄そのものです。

（これは餓鬼草子、墓場に放置された遺体が散乱し、それを食べようとする餓鬼の様子）



これらの事を総合的に見ると、地獄草紙や、餓鬼草子、もちろん病草子も、描いた絵師が自分の目の前にある現実を映しとった、極めて写実的な側面もあったと思われます。

それは、人間が死んで腐敗し、犬に食われ、蛆が沸き、やがて骨だらけになってゆく、それを定点観測するように描いた「九相詩絵巻」に象徴されているように思います。

(聖衆来迎寺の六道絵から『人道不浄相図』)



これらの現実を当時の人は、どのような倫理観、死生観で見ていたのでしょうか？

もちろん、当時は「怨霊」「物の怪」「鬼」「天狗」は実在すると考えられておりました。庶民たちは、日常生活のすぐ隣に、これらがいることを感じていた事でしょう。

ぼくにとって、平安時代は、まさに「お姫様」も「鬼」も、ぐっちゃぐちゃに存在する、カオス

の世界そのものに思えます。そこでは、ある意味、何が起こっても不思議ではないのです。
(百鬼夜行絵巻一室町時代一 練り歩く妖怪達)



「信貴山縁起絵巻」では、超能力を持ったお坊様が、長者の倉を念力で持ち上げ飛ばしてみせています。

(信貴山縁起絵巻、飛び倉の巻より)



小説を書く者としては、とても興味深い時代です。平安時代というステージに置いては、あらゆる思考実験が可能であろうと思われるのです。

実際、「今昔物語」「宇治拾遺物語」などでは、極限状況においての人間の姿が数多く描かれています。

その中から現代の映画の名作「羅生門」（黒澤明監督）や「山椒大夫」（溝口健二監督）が生まれました。

そこには「生きる」という事を、手づかみで、ガツと掴んで、ガツガツ喰らっている、というようなダイナミックさがあります。

僕の大好きな俳優に、デンゼル・ワシントンさんという黒人俳優がいます。彼は言います。

「僕が演じてみたいのは、悪いヤツさ。映画のセカイでは何でも悪い事、し放題だからね」

それは時代にも当てはまると思います。

「悪い時代」は何でもありです。

「平安時代」はまさに悪い時代でした。

それは、物語になりやすいのです。

「混沌」カオス、何でもあり、という自由な時空間を描ける。それこそが、芥川龍之介や、森鷗外も注目した、平安時代の大きな魅力なのかもしれません。

★参考文献

平安時代にご興味を持たれた方に、僕がお勧めしたい本を参考までに、いくつかご紹介しましょう。

①「とりかえばや物語」現代語訳 田辺聖子

21世紀版少年少女古典文学館 第8巻 講談社

**平安王朝における、男女逆転のお話です。男の子として育ててしまった女君。女の子として育ててしまった男君。貴族に生まれた二人は、やがて思春期を迎えるのですが.....。原典は、かなりエロチックな表現もあるらしいのですが、そこはさすが田辺聖子さんです。男性目線も巧みに取り入れつつ、見事な現代語訳で物語を紡いでゆきます。抜群の面白さです。

なお、この「21世紀版少年少女古典文学館」は、どの巻も読んでハズレ無し、と言えるでしょう。各巻、イラスト入りで、その時代の資料と解説がついています。

ハッキリ言って、読まなきゃ損です。

少年少女向けの本とは言え、監修は大御所、司馬遼太郎さん、田辺聖子さん、井上ひさしさん、という贅沢きわまりない全集です。

②NHK人間日本史 「紫式部と清少納言」

小西聖一著 酒寄雅志監修 理論社

**小学生高学年向けに書かれた本ですが、平安王朝を知る入門書としては最適でしょう。

他の小難しい専門書では一言も触れられていない

「貴族の人数」はこの本でようやく知る事が出来ました。

平安時代初期、日本の総人口は約600万人、そのうち貴族は150人程度でした。なんと、人口比率にして0,0025%の貴族を贅沢に生活させるため、600万人もの人達が働いていたのです。

③「装束の日本史：平安貴族は何を着ていたのか」

近藤好和著 平凡社新書 平凡社

**新書判のコンパクトな本にも関わらず、内容は充実。

平安王朝の貴族の装束についての百科事典としてつかえる便利な本です。

④「庶民たちの平安京」繁田信一著 角川選書

角川グループパブリッシング

**平安時代、「源氏物語」や「貴族」について書かれた本は、それこそ、うんざりする程、ゴマンとありますが、平安期の庶民の生活について考察した本は、ほとんど存在しません。それゆえに貴重な一冊と言えます。当時の通貨と物価、貴族の位階の基礎知識も解説されています。なお、この著者の語り口はかなり癖がありますので、くれぐれもご注意を。

⑤「平安京のニオイ」安田政彦著

歴史文化ライブラリー 吉川弘文館

**平安京、平安時代を探るには欠かせない、僕のイチオシの本です。学生の頃、ぼんやり習った平安時代。それがいかに想像を絶する時代であったか。異常な「実態」があった事を「ニオイ」の側面から探り出した好著といえるでしょう。

地道な発掘調査によって明らかになった平安京の実態。それを冷静に分析し、落ち着いた語り口で解説してくれます。淡々と述べられる事実の積み重ね。都の中央を貫く、朱雀大路の両側に掘られた大きな溝から出て来たもの……

「牛の骨、馬の骨、人間の生首」

これが平安京の現実です。

どんなニオイがしていたことでしょうか。

★おわりに

さて、今回のメイキング企画、お楽しみ頂けましたでしょうか？

「小説を書く手の内を見せて大丈夫なのか？」

と思われるでしょうが、御心配なく。

というのも、今回ご紹介した「映画的に小説を作る」というのは、ほとんどの作家が既に行っている初歩的な手法だからです。

その手法に飽き足らず、今日もまた、誰かが新しい小説の書き方、表現の革新にチャレンジしている事でしょう。

僕は今回、偶然にも平安時代という「時空間」に接触してしまったために、その面白さに心奪われました。機会があれば他の時代、他の時空をさまよってみたいとも思います。

精神と、探求と、表現の自由が許されている「平成の世」に生きている事に感謝し、同時に不穏な時代のうねりを感じつつ、終わりのご挨拶とさせていただきます。

最後までお付き合い頂きありがとうございました。

天見谷行人

メイキング・オブ「鬼とかぐや姫」

<http://p.booklog.jp/book/75232>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75232>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75232>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ